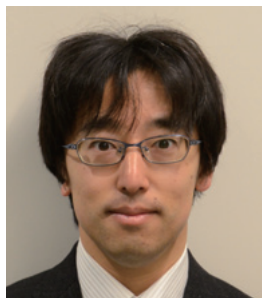


「片岡安賞」

残るレガシー

安田徹也

竹中大工道具館 学芸員



1978年生れ。横浜国立大学大学院後期課程修了。川崎市立日本民家園嘱託職員、株式会社安田工務店勤務を経て2016年より現職。主な著書に『建築史家・大岡實の建築』（青柳憲昌と共編 川崎市立日本民家園 2013年）、『水車大工 一水力エネルギーをデザインする一』（竹中大工道具館 2019年）。設計作品に深谷市稲荷町自治会屋台（2015年）。

はじめに

レガシーという言葉から私が連想するのは、ある二人の胸に去来した共通の感慨である。一人は太平洋戦争末期の日本の行政官、もう一人は紀元前5世紀のインドの宗教家。二人の思いを追体験するところから、本稿を始めよう。

1・レガシーとは何か

文部省宗教局の技師、大岡 實^{おおおかみのる}は法隆寺金堂・五重塔の疎開先を探していた。文化財建造物の責任者だった大岡は逼迫する国家財政の中から必死で予算を獲得し、戦局が悪化する中で文化財を守るために奮闘していた。各地で消火用の貯水池を整備し、姫路城には迷彩を施した。そして世界最古の木造建築である法隆寺金堂・五重塔だけは、文化財建造物の中でも唯一、解体疎開という措置に踏み切ったのである。金堂初層は壁画があるため解体できないが、それ以外の部分は全て解体して奈良県山中の土蔵に送り、金堂初層は厚い掩壁^{えんへき}で覆って爆風を防ぐ計画が立てられた。1944年末には何とか五重塔の解体が完了し、翌1945年1月から金堂解体に着手。この間、大岡の言葉を借りれば「何度となく不自由な汽車に乗って東京と法隆寺の間を往復した。行き先ききで空襲に会った。京都の妙法院に爆弾の落ちた時も京都に泊まってゐたし、名古屋の大空襲のときは丁度汽車で通りかかって汽車が止って立往生、浜松で銃撃に会い、大阪の空襲には奈良に居たし、いづれ何処かでやられるのだらうとまで考へたこともあった。」実際に3月と5月の空襲で芝の徳川家霊廟が焼失し、同じく5月にはついに名古屋城も焼失。そうした非常事態の中で法隆寺金堂は解体され、6月末にはその解体材の疎開の第一便が他の宝物類と共に奈良県東山村へ運ばれたのである。

こうして大岡は法隆寺金堂・五重塔という日本で最も重要な二棟を守り通したのだが、一方でその胸中には別の感慨が湧き起っていた。本人の言葉を借りよう。

「今迄は少しも感じなかったことであるが、中門の前に立ってあの柱の永年の風雨に曝された肌を見ると古い材木の一つ一つが千余年の星霜を無言の中に物語ってゐる気がした

まらない愛着を感じられたのである。中門だけではない。本坊の奥座敷に座って縁側の框からのぞいてみる秋海棠^{しゅうかいどう}一つを見ても「若し空襲で焼き払はれてしまったらばこんな風情もなくなってしまふのだ」と思ふと淋しかった。一寸した置物でも法隆寺には室町頃のものや少くも江戸中期頃まではゆくものが多い。たとへ重要な宝物は助かっても此等のものが全くなくなった法隆寺は味気ないに違いないと思ふと急にあらゆるものに限りない執着を感じるのであった。」¹

ここで大岡が感じているのは文化財的価値とは別の価値である。文化財的な視点から見れば、境内の諸建物の価値は金堂とは比すべくもない。しかしいざ無防備な形で取り残されたそれらを目にした大岡は、そうした一つ一つの建物への「限りない執着」を押さえることが出来なかった。これは建築には文化財的価値とは別の価値が存在していることを端的に示す挿話だと思われる。

紀元前5世紀。最後の旅に出た釈尊は商業都市ヴェーサーリーに立ち寄った。この地はかつて何度も教えを説いた思い出の場所であり、この時も多くの人々に説法を行った。そしてついにここで修行を完成させた釈尊は、自らの寿命の素因を捨て去り、三ヶ月後に涅槃に入ることを宣言する。そして、そこからの旅立ちの朝、いつものように托鉢をして食事を終えた釈尊は、「象が眺めるように」身をひるがえし、ヴェーサーリーを眺めながら弟子の一人にこう言うのである。「アーナンダよ。これはわたしがヴェーサーリーを見る最後の眺めとなるであろう」²

無常を観じて悟りを開いた釈尊ですら、思い出の地との永別に際し、ふりかえってその都市の姿を目に焼き付けずにはいらなかった。これは、人間の記憶や感情がいかに深く建築と結びついているかを示す決定的な挿話だと思われる。

以上、二つの挿話を御覧頂いた。大岡と釈尊は時空を超えて同様の感慨を抱いている。従ってこれは人類にとって普遍的な感情の発露と言えよう。なぜ人はこうした感慨を抱くのか。それに対する回答の一つが、イギ

リスの美術史家ラスキンが1849年に発表した『建築の七燈』の次の有名な一節である。「人間は建築がなくても、生活したり、礼拝することはできた。しかし建築なしに過去の記憶を蘇らせることはできない」³ 記憶は自分を自分たらしめる拠所^{よりどころ}である。その記憶は、我々の生活する空間、すなわち建築によってその安定性を担保されている。だからこそ我々には過去の建築を残す義務がある、とラスキンは言うのである。

即ち建築は、それ自体が本来持っていた価値と、建設後に蓄積された受容の歴史とが、混然一体となったモノなのである。絵画や小説、音楽などであれば、芸術的価値と、その受容の歴史とは分けて考えることが出来る。しかし建築は、ある一つのモノの中に芸術的価値と受容の歴史とが混在し、両者を分離することはできない。ある歴史的建造物が失われようとするとき、研究者はその文化財的価値を説いて保存の必要を訴える。しかしほとんどの場合、人々が感じるのは、その受容の歴史が失われることへの本質的な嫌悪感なのではないだろうか。大岡が限らない執着を覚え、積尊がふり返って目にしたのも、都市や建築に蓄積された受容の歴史であった。こうして人々に受容され、その歴史が刻み込まれていったとき、建築は人類にとって普遍的な価値を持つレガシーになるのである。「レガシーの新たな意味を問う」というのが本稿に与えられたテーマだが、やはりこうしたレガシーの普遍的な価値は今後も変わらないだろう。

しかし一方で積尊が説く通り、諸行無常は此岸の摂理であり、全てのレガシーを後世に伝えることは出来ない。残るレガシーと残らないレガシー、何が両者を分けるのだろうか。これを本稿の新たなテーマに設定し、それを考えるヒントとして次章では目を転じて日本の民家を見てみたい。民家という建築類型は江戸時代に生れ、建築的な発展を遂げ、歴史を獲得し、場合によっては一度使命を終えながらも形を変えて生き続けている。そうした過程を追うことで、レガシーを考える上での新たな視点を探りたい。

2・民家がレガシーとなるまで

室町時代までの民家は基本的に掘立柱で建

てられていた。そのため耐用年数が短く、数十年しかもたなかったと考えられる。従って当時の掘立柱住居は現存しない。但し興味深いのは、当時から民家の部材の再利用が行われていたことである⁴。これは原木から製材するよりは既存の解体材を転用した方が簡単だったため、こうした経済的な理由に基づく部材の再利用は近世にも続けられた⁵。部材の転用が日本建築の伝統の一部だったことは記憶にとどめておいても良いだろう。

そうした経済的理由とは別に、象徴的な意味を託されて残された中世の掘立柱住居の部材もある。それが静岡県伊豆の国市にある江川家住宅の「生柱」である。江川家住宅は17世紀前期に建設された礎石建ての民家だが、その中に1本だけ、前身建物の掘立柱が再利用された。この柱は構造的な役割は果たしておらず、恐らく前身建物の柱を象徴的に再利用した物と思われる。しかし建設から200年を経た19世紀になるともはやその意味は忘れられ、地面から生えた木をそのまま柱にしたとの言説が生まれて「生柱」と呼ばれるようになっていた⁶。すでに構造的な意味はなく、象徴としての意味も忘れ去られた柱なのだが、それでもなお森厳な佇まいをもって屹立し続けている。こうした形で古材を再利用することが早くも17世紀には行われていたのである。

さて、話が前後してしまったが、江川家のように17世紀になると民家に礎石建てが導入され、それにより民家の耐用年数は飛躍的に長くなった。現存する民家のほとんど全てが江戸時代以降の物である。こうして民家は一世代限りの仮設物から恒久的な建造物へと進化したのだが、それから更に150年程が過ぎた19世紀になると、民家の歴史が語られるようになった。現在と同様、当時も古い民家は希少だったのだが、そうした古い民家を顕彰し、あるいはそれにあやかって自らの家も長持ちさせたいと願う人々が現れたのである。

例えば上記の江川家には日蓮（1222～82）が書いたとされる棟札があった。もちろん実際に日蓮が書いたものではなく後世に作られた物なのだが、江川家に日蓮が書いた棟札が残ることは広く知れ渡っていた。江川家ではこれを模したお守りを発行しており、東京都国立市にあった柳澤家住宅には「伊豆葺山江

川太郎左衛門家作棟札」と書かれた木版刷の御札が残されている⁷。江川家の歴史にあやかったお守りが作られ、その功德によって自らの家も永く後世に伝えたいと願う人々がいたのである。

その他にも、19世紀になると古い民家にまつわる伝説が各地で語られていた。ある家では源頼朝が泊まったとの伝承が語られ、またある家では源義経が泊まったとの伝承が語られた。こうした伝承は必ずしも事実ではないが、古い民家に眼を向けて、それを歴史の中に位置づけようとする機運が生まれていたのは確かであろう。

更に、そうした伝承を鵜呑みにせず、実際に民家を観察してその古さを実証しようとする研究者も現れた。例えば菅江真澄（1754～1829）は各地の古い民家を訪ね、それらがカンナではなくチョウナで仕上げられていることを報告している。部材表面の仕上げ方は現在の民家史研究者にとっても年代指標の一つだが、その視点はすでに19世紀には確立していた。こうして民家は自らの歴史を獲得していったのである⁸。

一方それと併行して、民家は建築的にも発展を遂げた。例えば特に土間において、ダイナミックな梁組を強調するようになっていく。庫裏や城郭に先行例はあるものの、こうした架構の迫力をデザイン的な見せ場とする美意識は民家独自のメソッドとして確立され、大黒柱や指鴨居などの特徴的な部材が生み出されることになる。更にその部材寸法にも細かい微調整がほどこされるようになり⁹、大胆さと繊細さを兼ね備えた“民家”という様式が生み出されていった。書院造が和室の源流であると同時に、民家もまた、現在の和風住宅の源流の一つなのである。

こうした民家の美意識は近代以降の知識人をも魅了した。学問の世界では1917年に今和次郎（1888～1973）や柳田国男（1875～1962）らによって白茅会^{はくぼうかい}が結成され、大学出身の研究者による民家の研究が開始される。更に戦後には建築史家による本格的な研究も始まり、民家は重要文化財に指定され、国による保護がなされるようになった。民家は建築史を構成する一要素として歴史の中に位置づけられることになる。

一方で、数寄者と呼ばれる近代以降の茶人たちの間では民家を移築して茶室や客間として再利用する動きが広まった。益田鈍翁(1848~1938)や団琢磨(1858~1932)などが自邸や別邸に古民家を移築しており、それらは「田舎家」と呼ばれた¹⁰。彼らが評価したのは、時代を経てきた民家だけが持つ黒光りした部材の風格と、それらが織りなすダイナミックな空間、そして美的な完成度の高さであった。また必ずしも現状通りに移築するだけでなく、時には自身の好みに応じて改修することもあった。古民家を、あくまで同時代に生きる住宅として再生していたのである。こうした動きは降幡廣信氏(1929~)に代表される民家再生の活動へと継承されて現在に至っている。

以上をまとめると次のように要約できるだろう。民家は17世紀前期に礎石建ての導入によって耐久性を獲得し、それから150年程を経た19世紀には自らの歴史を獲得し、美的にも洗練されて独自の様式を得るに至った。そうした民家の美意識は近代の茶人をも魅了し、現在もなお民家再生という形で我々に新たな魅力を提供し続けている。現在、それらの古民家がレガシーであることを疑う人はいないだろう。民家という建築類型はこうして生まれ、レガシーとしての性質を獲得したのである。

3・残るレガシー

以上の民家の例を敷衍すれば、残るレガシーに求められる条件は次の諸点となるだろう。

まずは一定以上の耐久性が、残るレガシーの必要条件である。掘立柱住居が残るレガシーたり得なかった^{ゆえん}所以はその耐久性の無さであった。

そして第一章でも述べた通り、レガシーには歴史も欠かせない。大岡や釈尊が惹かれたのは建物が持つ受容の歴史であり、近代の茶人も古民家の来歴や風格を評価した。そうした歴史を獲得できた建物が残るレガシーになるのである。

同時に必要となるのが建築的な魅力である。民家が残るレガシーたり得たのは、その歴史もさることながら、そこに建築的な魅力が

宿っていたからに他ならない。民家に礎石建てが導入されて以降、100年以上の試行錯誤を経て生み出された建築的な美しさと、それを感知出来る感受性の持ち主、その両者が幸運な出会いに恵まれた時に、レガシーは未来に引き継がれるのである。

また民家の事例で興味深いのは、早い段階で移築や部材の転用など、さまざまな手法での再生がなされていたことである。常なる物はない。レガシーといえども時の流れには逆らえない。法隆寺金堂ですら解体疎開を経て今に至ることを思えば、変化に対する柔軟性も残るレガシーの必要条件かもしれない。

おわりに

これまで日本建築のレガシーというと寺院や神社、書院、茶室などが語られることが多かった。しかしそれらの多くは用途が変わらない建物で、為政者が建てた上層の建築である。一方の民家は民衆が自ら建てた建物で、社会状況の変化に伴い絶えず変化を余儀なくされてきた。これからのレガシーを考える上では、この民家の経てきた変遷こそが新たな視点を与えてくれるものと思われる。

そして実は、現在新築されているあらゆる建物も後世のレガシー候補である。我々の周囲の建物は果たして自らの由緒を物語る歴史を持っているだろうか。時代を超えて人々を魅了する美しさを備えているだろうか。そして、一本の古材になってもなお、辺りを払う威厳を持ちうるだろうか。我々の寿命の素因が尽きたとき、ふりかえって目にする建物がもしそうした建物であるのなら、未来に希望を託せるはずである。

- 1 大岡實「法隆寺塔、金堂解体の思い出」川崎市立日本民家園大岡實博士文庫資料4-3-11-134 未発表原稿
- 2 中村元訳『ブツダ最後の旅』岩波文庫 1980年
- 3 ジョン・ラスキン『建築の七燈』(杉山真紀子訳 鹿島出版会 1997年)の「第六章 記憶の燈」より。
- 4 網野善彦「百姓と建築」『中世民衆の生業と技術』東京大学出版会 2001年
- 5 中村琢巳『近世民家普請と資源保全』中央公論美術出版 2015年
- 6 『重要文化財江川家住宅修理工事報告書』重要文化財江川家住宅修理委員会 1963年
- 7 『国立市古民家復元の足跡 一国立市指定文化財・旧柳澤家住宅一』国立市教育委員会 1992年

- 8 安田徹也「江戸時代における民家史研究」『建築史学』第74号 2020年3月
- 9 坂井禎介「近世民家における見せかけの柱と束」『建築史学』第74号 2020年3月
- 10 土屋和男「近代数寄者の茶会記録に見られる「田舎家」に関する記述」『日本建築学会計画系論文集』第78巻第687号 2013年5月